

明治女性史のなかの新島八重

奨励	佐伯 順子〔さえき・じゅんこ〕
奨励者紹介	同志社大学社会学部教授
研究テーマ	メディアの描く女性、男性像とその社会的背景

わたしは、神が人の子らにお与えになった務めを見極めた。神はすべてを時宜にかなうように造り、また、永遠を思ふ心を人に与えられる。それでもなお、神のなさる業を始めから終りまで見極めることは許されていない。

（コヘレトの言葉 3章10―11節）

皆様おはようございます。本学社会学部メディア学科の教員をいたしております佐伯順子と申します。わたくしは「メディアのなかの女性」を研究テーマにしており、明治の女性雑誌や文学作品を通じて、明治の近代化のなかの女性像の変化を考えることを研究課題の一つとしております。そこで本日は、本学創立者の妻であった新島八重（1845～1932年）と明治の女性のあり方についてお話をさせていただければと思います。

近代女性の

先駆者としての八重

幕末から明治にかけての時代は、日本社会全体が大きな変革を迎え、女性にとっても激動の時代でありました。そんな時代において、八重の人生はどのように捉えることができるでしょうか。そして八重の精神は、現代を生きる女性にどのように繋がっているのでしょうか。

「会津藩士の娘であった八重は、戊辰戦争時、髪を切り、鳥羽伏見の戦いで倒れた弟・三郎の着物を着て、男装で戦った」と、昨年11月発行の『同志社タイムス』671号の記事（「新島八重と白虎隊記念館」）で、会津若松市の白虎隊記念館長である早川廣中さんが紹介されています。興味深いことに、幕末から明治期にかけて、男装した女性は八重以外にも見られました。明治時代には、近代社会の条件としての新たな価値観・道徳観が様々な分野で提唱されるようになり、男女平等もその新しい価値観の大きな要素を占めていました。とはいえ、教育や社会貢献において、女性が大きく差別されている状況は残念ながら変わらず、女性が男性と同等の勉学や社会活動をするためには、ときに男の装いをする必要に迫られました。女性解放運動の先駆者として知られる福田英子は、16歳のころまで、髪を切って男子生徒のような格好で通学したため、「マガヒ」（まがいもの、の意）とからかわれたといい、女性民権家として活躍した佐々木（ささき）豊寿（とよじゅ）（1853～1901年）も、少女時代には男装し、馬に乗って闊歩したといわれています。また、女性職業作家の先駆として知られる樋口一葉（1872～1896年）も、女性である自分を社会的に無力であると感じ、「かひなき女子（おなご）」と自嘲しながら、「おのこならましかば」（男であつたらよかったのに）と思う人もいるだろうと、日記に書き付けています。これらの女性たちと比べて、八重は一代近く年上の、いわばお姉さん格になりますが、明治以降に男性と対等に社会で主体的に活動しようとした男装の女性たちの象徴的な先駆として、八重を位置づけることができるでしょう。

メディアにいかす

女性の視点

かつてNHKの教育番組「歴史秘話ヒストリア」（2010年2月17日放送分）で、八重が「初代ハンサム・ウーマン」と命名されたのもっともです。この命名が、本井康博先生が指摘されたとおり（「八重が暮らした日々と街」『同志社タイムス』同前）、女性ディレクター押尾由起子さんの「卓見」であることは、現代のメディアにおける女性の視点が生かされた例としても興味深いものといえます。

現代社会では、明治に比べて女性の社会進出が広がってきたとはいえ、テレビ・新聞といったメディア業界で女性が占める割合は、まだ決して高くはありません。そのため、メディアが伝えるメッセージは、男性の視点から捉えられたものが多くなりがちです。しかし、NHKの大河ドラマの過去50作のうち、女性が脚本を書いたものは15作ございます。そして、新島八重を主人公とした来年の大河ドラマ「八重の桜」の脚本も、女性の方が書かれると伺っております。このような形で、女性の視点がいかされたメディアのメッセージが、新島八重に触発されて広がっていくとすれば、大変喜ばしいことではないかと思います。

男装して戦う女性といえば、1970年代に大人気となり、現在でも化粧品やテレビドラマ『派遣のオスカル』（2009年）などで根強い影響を与えている池田理代子さんの漫画『ベルサイユのばら』（1972～1973年）の男装の軍人、オスカルの姿を連想させます。オスカルが現代のメディアでも関心をもたれているのは、男性中心の日本のビジネス社会で女性が活躍し、自己主張するには、いまだに男の姿をとらねばならない、という社会的なプレッシャーの表れと捉えることができます。近代以前の武家社会もまた、基本的に男性中心の社会でした。戦いが男性の役割とみなされる傾向は、様々な時代の様々な文化圏に共通してみられます。しかし、社会が規定した女の役割、男の役割というものを含め、性別にとらわれない社会的な活動をしようとした八重は、女性というジェンダーの束縛を越えて男性中心の社会で戦う、現代の少女漫画やテレビドラマのヒロインにも通じる強さをもっています。

明治のキリスト教と

男女平等思想

明治期の男女平等思想の普及には、キリスト教が重要な役割を果たしました。その理由としては、キリスト教が説く人間の「魂」の永遠、精神的な価値が、女性にも男性と同じ内面的価値、精神的な平等や人としての存在意義を見いだそうとする思想につながった点が挙げられます。この思想は、キリスト教的価値観を基盤とした明治の女性雑誌『女学雑誌』の記事に典型的にみることができます。『女学雑誌』（第2号）の「婦人の地位」（明治18年）という論説では、人間の文明は、進化するにつれて、女性の魅力を肉体から精神に見いだすように変化すると主張しています。外見や肉体で女性の価値をはかるべきではない、という明治のキリスト教主義的な女性解放論の主張は、そのまま、「彼女は見た目は決して美しくはありません。ただ、生き方がハンサムなのです」という、有名な、夫・襄の書簡（ハーディー夫人宛て）中の八重への賛辞に重ねられるものです。襄と八重が、共にキリスト者となり、キリスト教主義に基づく教育を志したのは、決して偶然ではありません。

明治九（1876）年の八重と襄の結婚は、キリスト教式で行われましたが、この結婚は、やはりキリスト者であった若松賤子（しずこ）（1864～1896年）と『女学雑誌』の主宰者であった巖本善治との結婚を連想させます。八重と同じく会津に生まれた賤子は、横浜のプロテスタントの英語塾、後のフェリス女学院に学び、『小公子』の翻訳でも知られています。1889年、賤子と善治は横浜で結婚します。その際に、善治が「あなたは薔薇の花のように美しい」と賤子をたたえたところ、賤子は花嫁のベールを解いて「我を見たまえ。我、薔薇にあらず」と答えた、といわれています。このやりとりは、妻が夫の愛情の対象として外見を愛でられるのではなく、一人の人間として夫と対等に生きていきたいという、女性の側の主張の表れといえることができます。巖本善治が主宰する雑誌に記事を書き、夫が校長をつとめる明治女学校で教鞭をとった賤子は、文字どおり夫婦対等に協力して、明治の女子教育や女性の地位の向上に貢献したといえるでしょう。八重もまた、日本初の公立女学校「新英学校及び女紅場」で働き、同志社女学校の前身、女子塾でも教えました。妻と夫が支えあう愛に満ちた結婚という考え方は、日本では『聖書』由来の教えとして、戦後間もない人気映画「青い山脈」（1949年）でも、近代的な結婚の理想像を表現するために『聖書』からの引用が使われています。

現代日本の

女性をめぐる問題

現在の日本のバラエティー番組やトーク・ショーなどを見ると、女性は結婚後、家事や育児に専念するべきであるという考えが多くみられます。たとえば、あるトーク番組で、「芸人は芸のことだけ考えとったらええんや。家事や育児はすべて奥さんに任せなさい。そのかわり、収入は全部妻に渡しなさい」というアドバイスが語られておりました。しかしこのアドバイスは、現代を生きる日本の夫婦に対して、本当に正しいものなのでしょうか。

女性の社会進出の状況を図る指標の一つである、UNDP（国連開発計画）の発表によりますと、日本は、2008年に、男女の格差を示すジェンダー・ギャップ指数が108カ国中の56位、ジェンダー・エンパワメント指数（女性が政治・経済活動に参加し、意思決定に関与しているかを示す）は130カ国中の98位、そして2009年にはジェンダー・ギャップ指数が109カ国中の57位、ジェンダー・エンパワメント指数は134カ国中の101位という状況になっておりまして、国際比較上、日本の女性の社会的地位は残念ながらかなり低いという結果が出ております。この結果をもたらす理由としては、家事や育児は女性の役割であり、女性の支えがないと男性は仕事に十分集中できないという、日本男性の思い込みや男女の役割意識という、解決の困難な深い問題が横たわっています。そんな現状をみるにつけ、八重の「ハンサム」ぶりに好意をもった新島襄は、現代でも十分に先進的な男性と評価することができるといえるでしょう。

夫よりも先に人力車に乗って、夫をジョーと呼んだりすることも、明治時代には「悪妻」として批判されたようですが、このことは、女性による女性のための文芸雑誌『青鞥』（明治44、1911年創刊）に集った女性たちが、「新しい女」として揶揄されたことを彷彿させるものです。『青鞥』の女性たちも、世間の冷たい風に屈しないよう、女性解放や女性の自由のための議論を展開しましたが、八重もまた、自分の生き方を貫き、夫・襄亡き後も、日清・日露戦争の篤志看護婦として「日本のナイチンゲール」との異名をとる社会貢献を果たしました。

夫を亡くした後、教育や社会活動をした明治の女性としては、北村透谷の妻・石阪美那子（1865～1942年）も挙げられます。美那子と透谷の夫妻は共にキリスト者で、明治

21（1888）年、透谷宅にてキリスト教式で結婚しました。夫の没後、美那子は米国に留学し、帰国後は英語塾を開き、師範学校の教壇にも立ちました。先にご紹介した、福田英子・佐々木豊寿・若松賤子・樋口一葉らは、明治のうちに亡くなってしまいましたが、八重も美那子も昭和まで生き、当時の女性としてできる限りの社会貢献をしたことは特筆すべき事実だと思います。

真の「良妻賢母」とは何か

明治期は男女平等論が高まったといいながらも、女子教育の目的は「良妻賢母」の育成であり、明治の女性雑誌には、女性は男性を立てるべきもの、妻として母として家庭を支えるのが女性の役割という主張が随所にみられます。過剰な西洋化を戒め、女性は男性に従うべきという、儒教道徳と融合した女性観が明治の理想の女性像の実態であり、その枠組みから逸脱する女性は厳しく批判されましたが、八重の生き方はこうした「良妻賢母主義」の枠組みに当てはまらない新鮮さをもっています。

そもそも、「良妻賢母」の定義というものが、明治の女性論のなかではかなり歪んでいるのではないかとわたしは考えます。「良き妻、賢い母」というのは、物理的に家庭にとどまっていることを意味するのでしょうか。決してそうではないと思います。現在でも、「仕事を辞めて家庭に入った」というと、いかにも家事と育児に人生を捧げる、女性として素晴らしい選択だと見なされがちなのですが、家庭にとどまっていることイコール「良き妻、賢い母」とは必ずしも言い切れないと思います。わたくしたちは、八重の生き方を通じて、そうした日本的な「良妻賢母」観をあらためて見直すことができると思いますし、家庭の外で社会活動をしていても、あるいは世間の目から見て生意気な女性だと揶揄されようとも、夫婦として良好な関係を築き、賢い妻と評価できる女性はいくらでもいると思います。そういった点で、今回の大河ドラマで、八重がどのように描かれるのかは、大変注目されるのではないかと思います。

現代にいかす「女性の力」

さて、明治の京都で活躍した女性としては、宮中に出仕した岸田俊子（1864～1901年）が思い起こされます。俊子が「同胞姉妹に告ぐ」という評論を、新聞『自由燈』（じゆうのともしび）に発表したのは明治17年のことでした。そのなかで俊子は、「吾が親しき愛（うつく）しき姉よ妹よ・・・（中略）・・・我邦の風俗の如く男を旦那亭主御主人と尊びつ、下女（げちよ）婢妾（はした）御召仕（おめしつかひ）と賤しめられて、絶えて同等の待遇（あしらひ）受けざるは、甚だ遺憾の極ならずや。・・・（中略）・・・旧弊を改め習慣を破りて、彼の心なき男らの迷ひの夢を打破り玉へや」（句読点を読みやすく改め、原文の（ ）表現を尊重した）。

と力強く同時代の女性に自立を訴えています。このように、関西・京都にゆかりの女性の姿も、八重の姿から連想されます。

昨年はNHK大河ドラマの50周年であり、京都の高島屋でも、7月に「大河ドラマ50の歴史展」が開催されました。今年のものも含めて過去51作の大河ドラマの主人公を調べてみると、女性単独主人公の作品が8作、夫婦の主人公が2作、そのうち、幕末から明治維新にかけての女性が主人公となる作品は、旗本の娘たちを描く『三姉妹』（1967年）、川上貞奴をヒロインとした『春の波濤』（1985年）、そして女性医師が主人公の『いのち』（1986年）がありました。80年代の半ばに、連続して女性を主人公とする大河ドラマが制作された事実は、男女雇用機会均等法の施行（1986年）といった、当時の女性の社会進出をめぐる時代背景を反映しているのではないかと思います。

そして今、新島襄ではなく、福沢諭吉や大隈重信でもなく、新島八重という女性にドラマの焦点が当てられたということは、会津を舞台とする震災復興という意義と共に、女性を主人公とする点に重要な意味があると思われます。

日本は今、経済的・社会的に様々な難題を抱えております。先ほどの讃美歌にもありましたが、まさにわたくしたちは「試みの世」に生きていると思います。そんな時代に、未来への展望を切り拓くためには、女性の力が必要です。先ほど読んでいただいた聖書の箇所は、わたくしが中学時代にミッションスクールで学んだ『聖書』のなかでも、「時」について語られる、大変好きな一節です。現代の日本社会はまさに、明治時代以来の価値観の転換期を迎えている重要な「時」であると思われます。日本の女性たちが明治期に新しい生き方を迫られたように、今日も女性の力が求められていると思います。新島八重を主人公とするドラマが来年放送されるという事実も、こうした社会状況と無関係とは思われません。サッカーのなでしこジャパンの活躍を思い起こしても、「女性の力」は日本のパワーの大きな源のひとつです。

震災や原発事故という困難に直面する、わたくしたちが生きているこの「時」に何ができるのか、新島八重の足跡にエンパワメントされて改めて考えながら、震災の復興を祈り、死をのりこえる主の力を信じ、今学期のテーマである「平和を実現する人々」にわたくしたちが少しでも近づけるように祈りたいと思います。

2012年1月25日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録